

Ⅲ 高機能発達障害学生への聞き取り調査

1. 聞き取り調査のねらい

本調査では、当大学にて修学支援を受けている高機能自閉症学生及びその保護者に対し半構造化インタビューを計8回（各90分）行い、高大連携の在り方と高校までの教育課程と大学での教育の質的な違いに対してどのような支援ニーズがあるかを探索することを目的とする。またその際、本人の障害特性を理解するため、最もその特性が顕著に現れるであろう幼少期から遡って各教育課程（初等、中等、高等教育）に於いてどのような支援を受けてきたか、またどのような支援があることが望ましかったのかをインタビューしていく。

2. 聞き取り調査の日程

2009年1月13日	第1回インタビュー	○インタビューの導入 ○幼稚園から現在までの経緯
2009年1月20日	第2回インタビュー	○ご自身について ○AQ、バウムテスト
2009年1月27日	第3回インタビュー	○風景構成法 ○気持ちとその対処法、診断について
2009年3月3日	第4回インタビュー	○受けていた支援（中学校） ○その支援に対する印象（中学校）
2009年3月11日	第5回インタビュー	○高校生活について ○大学進学について
2009年3月17日	第6回インタビュー	○入試～入学までの体験・印象 ○大学生活であると良かった支援について
2009年3月27日	第7回インタビュー	○所属ゼミや指導教員との コミュニケーションについて ○ゼミについての座談会
2009年3月31日	第8回インタビュー	○インターンシップについて ○座談会

3. インタビューの構成

○ インタビュー対象者

Aさん（女性、21歳、大学4年、高機能自閉症の診断あり）

Aさんの母親

○ インタビュアー

西村 優紀美（保健管理センター准教授）

吉永 崇史（学生支援センター特命准教授）

桶谷 文哲（学生支援センターコーディネータ）

○ 時 間

90分を限度とし、概ね70分～90分程度。

4. 各回のまとめと考察

<第1回>導入と幼稚園から現在までの経緯

- ・ 保育園ではひとりで砂遊びをしていたり絵本を読んでいたりとすることが多かった。
- ・ 家では「にこにこぷん」をテレビでもビデオでも見ていた。
- ・ テレビは怖いものも出てくるので何度もつけたたり消したりしていた。
- ・ おとなしい子だったがパニックはすごかった。
- ・ 歯医者では泣き喚いていた。
- ・ 大きい音は今でも苦手。
- ・ ショッピングセンターにいけない時期もあった。
- ・ 幼稚園から小学校の低学年では朗読を怖がって耳をふさいで教室にいられなかった。
- ・ 顔のアップが使われているポスターも怖がることがあった。
- ・ 運動は苦手。
- ・ 勝ち負けにこだわり、リレーなどで追い抜かれると地面に寝転がって暴れたりすることが小学校1、2年生まであった。そのうち慣れていった。
- ・ 他にも2つ3つの情報を同時には聞けず混乱する。（これについての本人の自覚は小学校高学年だという）
- ・ 教室のうるささにも耐えられず出てしまうことから、小学2、3年は特殊学級に在籍した。
- ・ 4年時からは父親の仕事の理由で転校した学校に特殊学級がなく、通常学級に在籍した。
- ・ 4年時にこれまであった音に対する過敏さや教室でじっとしてられないなどの

困難さが治まってきた。

- ・ 担任やクラスメートは特に怖いとかはなかった。
- ・ 特殊学級に在籍することになった経緯は、教室の外にでることが多くなり、担任の先生だけでは対応が難しいということで専属の先生についてもらう方が合理的と両親が校長から持ちかけられ、それに合意した。
- ・ 診断は3歳3か月のとき。
- ・ 保育園、小学校、中学校、高校とそれぞれの過程で「このようなことがある」と障害について具体例を添えて伝えてきた。
- ・ 小学校で好きな教科は、はじめは算数、その後、まんが日本の歴史の影響で日本史が好きになった。中学あたりからは理科も好きになり、高校では生物が好きだった。
- ・ 国語については、はじめは朗読ができなかったが、高校では得意教科で点数も高かった。逆に高校以降は数学が難しくなった。
- ・ 成績は中学ではトップクラス。平均90点ほど取れていた。
- ・ 小学4年から中学2年まで関東に転校していて、また中学3年から富山に戻った。
- ・ 転校は戸惑うことはあったが、一ヶ月ぐらいで馴染めた。新しい環境に少しずつ馴染めたら結構楽しんでた。
- ・ 嫌なことがあった際に昔は暴れていたが、今は音楽を聴くことや、じっと耐えることで対処している。
- ・ 小学5年から中学3年まで（東京に転居後）いじめを受けていた。突然、本人から学校に行きたくないと言ったが、その理由をクラスメートの母親から聞き知った。本人はなかなか言えなかったという。
- ・ 発語はあったが単語を話すようになったのは3歳6か月からで、母が物の名前を言った時指さして、聞いてみたことから話せることが分かった。
- ・ 本人は、大学のゼミで高機能自閉症について調べたが、その中でコミュニケーションの障害や相手の気持ちが見えないこと、聴覚過敏や板書を頼りにするなどの視覚優位は自分に当てはまるが、こだわりについては当てはまらないという。

○考察

第1回として全体的な発達過程を経時的に聞いた。幼少期は、言語発達や聴覚過敏、初めての環境に対するパニック、ルール理解の困難さなど様々な困り感を持っているが、10歳を境に不思議なほど落ち着いている。心の理論の通過点と一致してはいるが、本人も保護者もその理由はよく分からず何となくだという。一貫して語られていたのはこだわりが少ないということだった。また、教育課程の中で小学4年以降、特別な支援は受けていないことから、一定の環境への適応はしていたものと思われる。

<第2回>ご自身について、AQ、バウムテスト

① 自分の好きなところ

- ・ 納得いくまで聞いたり調べたりするところ
- ・ 面白いと思ったらのめりこむ
- ・ まめなところ（掃除や生理は苦手）
- ・ 気配りができる（母の手伝いをする）
- ・ 正直もの（嘘をつくのもつかれるのも苦手）

② 自分の少し嫌いなところ、直したいところ

- ・ 嫌いなタイプのものにあからさまな表情をする
- ・ 取りかかりが遅いこと
- ・ 昔は指示待ちタイプだった
- ・ 以前は自分に自信がなくて、うつむいていた。それを振り払うように荒れたりしていたこと。改善方法として目に見える結果を求めて勉強したという。

③ 一緒にいて心地よい人

- ・ 自分が慣れてる人
- ・ 家族、近い親戚、地域の発達障害支援施設の方々
- ・ 親切な人、紳士
- ・ 理由は安心できるから、以前は慣れていないことで尻ごみしていた。

④ 一緒にいて心地悪い人

- ・ しつこい人
- ・ からかう人

⑤ 自分が他の人とで違うところ

- ・ 順番立てて考えるところ。人と話がかみ合わない。
- ・ 要領が悪い
- ・ 動作がゆっくりなところ。
- ・ 暗黙の了解が苦手。

○考察

今回、心地よい対人関係の条件が慣れていて安心できる人ということからも、複雑な対人関係には困難を感じていて本人もそれを自覚しているといえるだろう。

特筆できる点としては、からかいなどのいじめにより自己肯定感を落としているときに、本人自ら成績を上げることでその状況に対処したところであろう。自閉症スペクトラムの中でも高機能者に限り学習が適応行動になる可能性は、モノトラックを逆利用して不快感を遮断するという意味でありうるのかもしれない。

<第3回>風景構成法、気持ちとその対処、診断について

①イライラした気分や不安になったときの対処法

- ・ 昔は暴れることもあった。今は携帯を触る（データを見たり、メールの確認）
- ・ 10分程度で落ち着く。
- ・ いつのまにか身についた。

②自分が困った状況になったときや、苦しくなったときの対処法

- ・ パニックになっても仕方がないので足踏みしている。
- ・ 母親が初めてのことには逐一サポートしてきた。

③他の人を理解するときの方法。理解するのに、助けになったモデル

- ・ 初めての人はよく分からないので自分からは声をかけない。
- ・ 相手の話を聞く。自己紹介を聞く。
- ・ 他者どうしの会話を聞いていてもあまり分からない。
- ・ 相手の名前、顔を覚えるのが苦手
- ・ 名札を参考。
- ・ 最近話し声で相手が分かることもある。
- ・ やわらかい雰囲気とを感じる人はいる。
- ・ 第一印象とかは重視していないという。偏見がない。

④これまで、社会の仕組みやルールの理解の方法

- ・ 小さい時から「おはよう」と「さようなら」などを混同することがある。
- ・ 人のものを覗き込むのは怒られるまで分からなかった。
- ・ 幼い頃はピンポンダッシュをして近所から苦情が来たこともあった。
- ・ 消防車を呼んでしまったこともある。
- ・ マイクに興味があり集会のときに壇上に上がることもあった。

⑤自分にとって良い指導者、支援者

- ・ 担任の先生は偏見を持たないよい先生だった。それから言うべきことは言う先生。
- ・ 友達はそうでもない人もいた。

⑥人との会話で困ること、理解できないと思うことの具体的な例。

- ・ 友人の話に入れないことはよくある。
- ・ 聞く側に回ったり、諦めてその話から外れるようにすることもある。
- ・ 4人以上の話になるとついていけない。
- ・ 知らない人についての話は聞けない。
- ・ 悪口は自分のことを言っていると感じた時期もあった。

⑦「診断」について

- ・ 3歳3か月に診断
- ・ 母親が告知。
- ・ 中学生の時、自己肯定感が下がり自己否定感が強くなったときに伝えられた。
- ・ 告知されたけどよく分からなかった。

- ・ なので、告知の前後の気持ちの変化もなかった。
- ・ それでも診断や告知は、自分にとって必要だとは思う。訳が分からないまま人とうまくいかなかったのはつらかった。
- ・ 少し落ち着いてきた高校一年の頃、状況を理解したり何かおかしいと思うようになり、障害特性もそうかなと思えてきた。
- ・ 小中の頃は母から保護者に障害のことを伝えたが、高校からは落ち着いてきたこともあり担任にしか伝えなかった。
- ・ 大学では、ゼミ生と指導教員には伝えた。それによる周囲の変化は感じない。

○考察

イライラ感や困った状況での対処は出来ているようで、そういった面での配慮や支援は特に必要としていなかった。ただ、他者理解は難しいようで何らかの方法で学習しているというよりは、場を離れることや黙っているといった形で即時的な対処をしている。本人は特に困り感を持っていないので積極的な支援は必要としていないが、大学内でそのあたりを体験的に学習する場を提供することは広義での支援として重要であろう。

また、本学生は診断と告知の問題を医療機関や保護者との間で早期にクリアしているが、実際の高大連携や大学での修学支援では寧ろ診断さえ持たないケースがほとんどであり、そういった際に高大連携としてどのような支援ができるかは大変重要である。

<第4回> 中学の頃受けていた支援、受けなかった支援

① 中学入学の際に感じたこと

- ・ 制服や教科担任制、テストなど小学校からの変化に戸惑った
- ・ 部活や教室移動についてはそれほど困らなかった
- ・ 小学校からの申し送りや母親との連携程度の支援

② 学習面について

- ・ 英語は少し驚いたがそのうち面白くなった。
- ・ 数学は3年から難しくなった。図形が苦手。
- ・ 理科の実験は楽しかった。
- ・ 特に支援は必要なかった。

③ 運動会などの行事について

- ・ 行事ごとは幼い頃は、苦手だったが中学の頃は逆に好きで支援の必要はなかった。

④ 校内での対人関係について

- ・ いじめを受けていたことがわかり、担任の先生がクラスの問題として指導したが、止まらず大変苦しい思いをした。

- ・ しつこいのが嫌だった。
- ・ 途中から言っても無駄だと思った。

⑥高校進学について

- ・ 家に近い高校で、学力レベルの高い高校を目指した。レベルの高い高校の方がいじめられないと思った。

⑦中学時代、自分を支えてくれた人

- ・ 家族が一番。
- ・ いじめでとても辛く、やけになりかけ（なっていたかも）だったので、家族に支えられていなかったら大変だったと思う。
- ・ 担任の先生

⑧中学校で一番役に立った支援

- ・ 中学1，2年の担任が同じで支えてもらった。

⑨支援を受けていても、解決していかない困りごと

- ・ 集団からの孤立。いじめ。

○考察

いじめを受けていた中学生時代の話だったことで、本人には当時を思い出させることになり一時的だが辛い思いをさせた。だが、最後に「中学生だった自分に対して何かメッセージを」と聞いた際の言葉には当時の自分を客観的に捉え、その辛さを現在の自分が前向きに受け止めている大変力強いメッセージであった。大学では中学のように直接的ないじめや嫌がらせは少ないが、小中学校時代になんらか他者からの攻撃を受けている場合、迫害的な観念にとらわれ、二次的に対人関係上の困難さを示しているケースは多く、過去の経験には慎重な受け止めが必要であることを示唆する回であった

<第5回>高校生活と大学進学

①高校進学に対して蔵さんが期待したこと

- ・ 中学より多くのことを学べること
- ・ いじめがなくなり安心できること
- ・ 入学前に学校訪問もし、印象もよかった。
- ・ 父親の出身校で良い高校だと聞き期待した。

②高校と中学との違い

- ・ 教科が中学よりさらに細かく分かれ、対応できるか心配だった。
- ・ 休み時間にちょっかいを出されずに済むようになり楽になった。

- ・ 文化祭など規模が大きくなり、自主性を求められたが、自分の出来ることをすることで対処した。（苦手は避ける）
 - ・ 家庭学習が多くなった。
 - ・ みんな勉強に集中したり、グループもできたりしたが、1人であることが多かった。
- ③高校生活での悩み
- ・ 告知はされていたが、障害特性をよく知らなかったので、他の人と違うと思った。
 - ・ 漠然としていてモヤモヤがあった。はっきりしたら楽かとも思った。
 - ・ そのときは自閉症とは一致しないと思っていた。今考えると合っているが。
- ④高校生活で学んだこと
- ・ 静かで落ち着くため図書館で過ごすことが多かった。
 - ・ 男子のグループに近づかなくなった。
 - ・ 他の人と何か違うこと
 - ・ 将来何になりたいか考えていないことが分かった。
- ⑤中学生活と高校生活に点数を付けるとするとそれぞれ何点ですか？
- ・ 中学は学習：95点 生活：50点
 - ・ 高校は学習：80点 生活：80点
 - ・ 合計はあまり変わらないが高校の方が良かった。
- ⑥大学進学について
- ・ 実家から通えて、成績が足りるところで進学先を考えた。
 - ・ オープンキャンパスで専攻を考えた。
 - ・ 高校からの進路指導上のアドバイスはなかった。
 - ・ 高校とは違うとは思っていたが、早めに母親からスケジュールなどの違いを聞いていて良かった。
 - ・ 大学からほしい情報は、大学生活全般の情報、シラバス、単位の取り方など。

○考察

本学生は中学生のとき母親から障害告知を受けているが、その時は自己認知が育っていないことから自身の困難さと障害特性との結びつきを全く理解しておらず、高校年齢になり初めて他者とは違う自分を漠然と感じており、それがはっきりすればいいと思っている。ここで大切なことは、障害告知を受けることが本人にとって“はっきりすること”ではないということだろう。

また、高校での支援は特に受けておらず、本人から学習について積極的に教員に聞きにしている程度である。大学進学の際も本学生の出身校が進学校ということで大学側から一般的な情報提供はあったようだが、特別な指導上の配慮や情報提供はされていない。そういう意味でも本学生にとってのメンターはこれまでずっと母親である。

<第6回>入試～入学までの体験・印象、大学生活であると良かった支援について

①入試で印象に残っていること

- ・ センター試験はたくさん練習した。時間が間に合わずはじめは大変だった。
- ・ 小論文で戸惑った。

②入試本番での困難さ

- ・ 試験会場の人数などは特に気にならなかった。
- ・ 机が1人1人別々で楽だった。

③大学入試での配慮・支援について

- ・ 特に配慮はいらない。ちゃんと受けた方が受験らしい。
- ・ 別室受験は逆に落ち着かない。
- ・ 時間の延長もいらない。同じ条件のほうが自分のためになる。
- ・ 入試で突然のトラブルがなければ特に必要ないと思う。
- ・ 必要な前情報は高校として大学の先生に説明してもらっていた。

④合格後にあると良かったと思う情報

- ・ 申し送りとしてどこにつながればいいのかの情報
- ・ 高校でもしトラブルがある場合はその支援方法を高校からも伝えてもらいたい。

⑤大学生活がスタートして困ったこと

- ・ 教室移動が多く、迷うことが多かった。何度も配置図を見て行ってみた。

⑥履修について

- ・ 特に困ることはなかった。シラバスでわかった。
- ・ 母が本人にストレスをためていると思ったらカラオケに連れて行った。
- ・ グループワークも近くの人とグループを作れてうまくやれたと思う。
- ・ グループワークでは出しゃばり過ぎないように注意した。

⑦学内での過ごし方について（講義の空き時間など）

- ・ トイレ行ったり、教室移動して過ごす。
- ・ 困難は特にない。

⑧学外での過ごし方について（アルバイト、サークルなど）

- ・ アルバイトもサークルもしていない。
- ・ サークルは講義で忙しいことを考慮したことと入りたいところがなかった。
- ・ カラオケや本屋やCDレンタル屋に行くのが好き。
- ・ 専攻コースでの飲み会などは楽しい。イベント好き。

○考察

本学生は、学習面でも環境変化の面でも特に支援を必要とせず、必要のない入学試験上の支援は寧ろ自尊感情の面でも合理的配慮にならないことを示している。

一方、入学後の配慮と修学支援は母親が必要としており、本学生が入学時には当支援室がまだなかったため、わざわざ医療機関から大学教員を紹介してもらっている。

現在は当支援室が、その命を担っている。

<第7回>所属ゼミや指導教員とのコミュニケーション

① 所属するゼミ

- ・ 教育に関する情報リテラシー、教育工学、教材作りなど
- ・ 初めはテーマを絞っていなかったが何人かの教員のところで話を聞き発達障害をテーマにしたいと思い決めた。

② ゼミ生の人数

- ・ 院生を含まないと3名
- ・ 同学年は1人

③ 卒論のテーマ

- ・ 高機能自閉症の一般の人にもわかりやすいネット教材
- ・ あまり派手なコンテンツにはしたくない
- ・ HTMLを使う

④ 座談会

- ・ 公務員試験の話
- ・ インターンシップの話

<第8回>インターンシップと座談会

①インターンシップ

- ・ インターンシップは母親としても受けてもらいたい。
- ・ インターンシップは対外的でサポートしづらく、ほとんど障害について配慮されない可能性がある。
- ・ 学内インターンシップを支援室でサポートすることは出来る。
- ・ 今は就労を障害者枠には出来るだけしたくない。(本人も親も)
- ・ 公務員試験とのスケジュール調整の話。

②座談会

- ・ 高大連携に対して期待するところ
- ・ 啓蒙活動
- ・ いじめの記憶と今元気に過ごせている理由など

○第7回、8回の考察

大学での修学支援の終着点の一つとして就労があるが第7、8回のインタビューでは具体的かつ現実的な問題としてインターンシップや大学卒業後の障害者枠の問題、公務員試験など実際の支援と同時進行のような形となった。この問題は、発達障害者支援の最大かつ最難関であり、現在様々な関係機関とつながりつつ検討中であるが容易な問題でないことを実感しており、今後の大きな課題である。



スタッフ(右)は学生(左)の話の聞きながら必要な支援をさぐる。部屋にはパソコンやボイスレコーダーなど支援機器が並ぶ＝英国・ロンドン

発達障害の学生 支援の試み

大学に相談窓口／具体策を冊子化

対人関係がうまく築けず、読み書き計算に問題を抱える発達障害者への支援に、大学が取り組み始めた。大学生は「まず、学生の中に、こうした発達障害の特性を持つ学生がいることがわかってきたら、発達障害の学生が3割近い英国での支援も報告する。」

(借金書)

履修計画をつけない、卒論で自分の考えを書けない、他の学生と一緒に実験ができない。こうした学生の困り事を支援するため、富山大は昨年度、「1ターム(1学期)支援室」をつつた。学生から相談を受けながら、富山大学保健管理センター長の斎藤清二教授(心療内科学)は「困り事には、発達障害の特性

戸惑った。高校までは時間割りや教室が決まっていた。大学ではたくさんあるメニューから履修計画を自分で考え、教室も授業のために移動しなくてはならない。履修計画は、教員や母親(50)に手伝ってもらってつくったが、母親は「急に自主性を求められることになり、混乱しなにかと心配した」。

冊子の作成にかかわった信州大学教育学部の高橋知音・准教授は、障害学生への対応マニュアルの作成や支援員養成、個人に応じた環境を整えることなどを盛り込む。「発達障害の学生が学びやすいよう環境を整え、ほかの学生にも親切に分かちやすくなる」と話す。

先進国・英国 試験時間延長／記入欄ミスも得点

ただ、日本の場合、発達障害の支援の対象は、対人関係や行動に問題を抱えるアスペルガー症候群や注意欠陥・多動性障害が中心だ。読み書き計算などに困難を抱える学習障害への支援はまだ少ない。

学習障害の対応が進んでいるのが英国だ。人口の10%が学習障害とされ、読み書きが困難な大学生は珍しくない。

「試験問題は声に出して3回読まないと分からないです」ロンドン中心部にある「セントラル・ロンドン・アセスメント・センター」は、大学など高等教育を受ける障害者を支援する施設。面談している女性は大学修士課程の学生で、将来、会計

士を目指す。最近、診断を受けた、学習障害と分かった。読んで理解するのが遅い、スペルを間違え、左右が分からなくなる。子どものころからの困り事をスタッフが聞き取って、途中で女性に課題を与え、できることできないことを探る。その結果、文字が固まって見えず、数字の見えどしやつりの混乱があることが分かった。

女性にはパソコンと読み上げソフトなどが支給された。大学へ、試験時間延長や声を出して文章を読み上げるなど、必要な配慮が報告された。

06年度の英国高等教育統計局のデータでは、大学1年で障害を申告した学生は4万7490人であった。長男が小の時、特殊学級に移るように担任からや